



たまのよこやま

巻頭特集

遺跡だより

調布市染地遺跡 発掘大特集

築地市場跡遺跡



令和3年度企画展示「現場のミカタ」開催中！

大量 quantity



ソメチイセキ 染地遺跡



ハツクツダイトクシユウ 発掘大特集

今回調査した遺跡

当センターは東京都住宅供給公社から委託を受けて、令和元年8月から調布市の染地遺跡第128地点の発掘調査を実施してきました。本遺跡の発掘調査が令和3年2月に終了しましたので、その成果の一部をお伝えします。

染地遺跡はどんな遺跡？

染地遺跡（調布市No.49遺跡）は、多摩川中流域左岸の沖積低地に立地し、染地二丁目から三丁目まで約360,000㎡にわたります（図1）。発掘調査は昭和41年から行われ、現在までに150以上の地点が調査されています。その結果、沖積低地内の微高地上で古墳時代から古代にかけての住居跡が多数見つかると、この地域に当時の大集落があったと考えられるようになりました。

第128地点で見つかったもの

第128地点では約6,500㎡を対象に発掘調査を行い、主に弥生時代から近世にかけての遺構・遺物を検出しました。調査区中央に東西方向へ伸びる浅い谷状の窪地があり、この窪地を挟んで南北に住居跡が所狭しと並んでいます（図2）。

弥生時代は、後期の住居跡が27軒確認され、染地遺跡における集落の開始時期がこの時代まで遡ることが事実となりました（写真1）。地震で生じたと思われる噴砂の痕が、住居跡の床や壁から見ついているという点も注目されます（写真2）。遺物は久ヶ原式・朝光寺原式・吉ヶ谷式土器が主に出土し、石器や土製品も少量ですが出土しています。



写真1 住居跡を調査する様子



図1 染地遺跡第128地点の位置
（国土地理院基盤地図情報〔数値標高モデル〕データを使用）

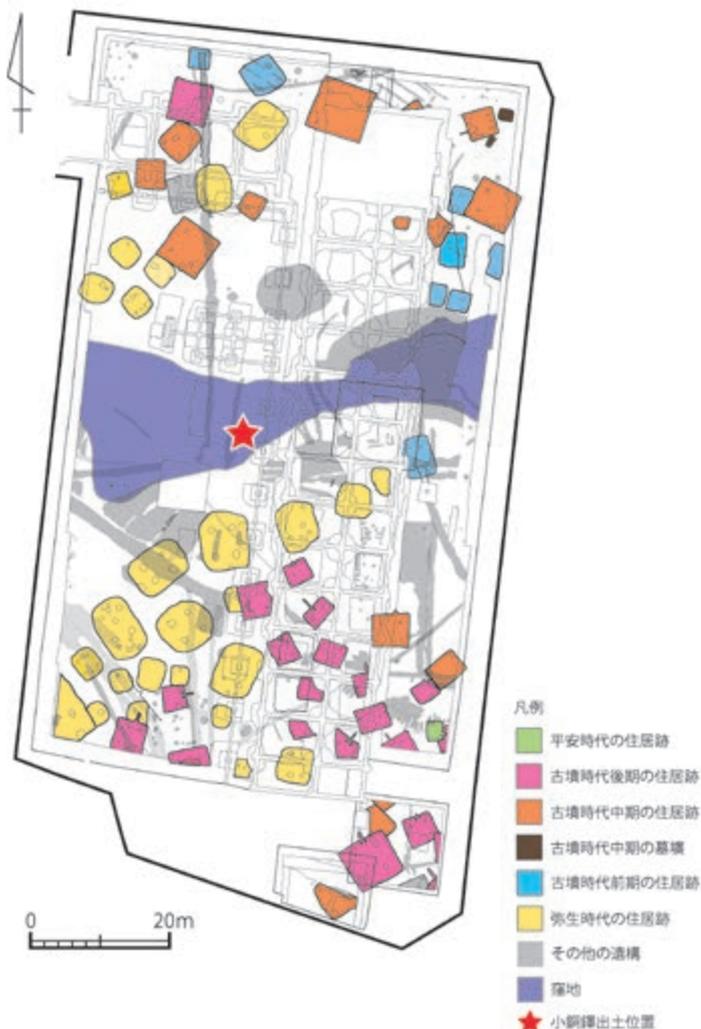


図2 確認された主な遺構とその位置

また、当時貴重だった青いガラス製の小玉も見つかっています。

古墳時代は住居跡 44 軒、土坑 2 基を調査しました。前期は 8 軒検出され、主に調査区の北東側に集落が展開します。中期は 15 軒が南北に分かれて広がり、中には 1 辺約 8m の大型住居も見られます。後期は 21 軒検出し、南側に集落の主体があります。さらに、中期から後期の住居跡に伴うカマドには、他地域で見られる長煙道型のものが含まれています（写真 3）。また、後期の住居跡の中には、板や杭で囲いが設けられていた可能性のある貯蔵穴も確認されました（写真 4）。北東隅の土坑 2 基は中期の墓壇と考えられ、副葬品らしき白玉が数十点出土しました。主な遺物は五領式・和泉式・鬼高式の土師器で、初期須恵器を含む須恵器や石器、土製品も少量出土しています。勾玉・管玉といった玉類や、石製模造品も見つかっています。

平安時代の遺構としては、住居跡 1 軒を検出しました。遺物は土師器、須恵器が主体で、わずかながら緑釉陶器、灰釉陶器が出土しています。墨書の残る土師器片も数点あり、中には人の顔らしきものが描かれている破片も認められました。

中世から近世に関しては、溝状遺構が 60 条程度確認されましたが、用途や時期の詳細はまだ分かっていません。中世の遺物は国産の陶磁器片、かわら

け、舶載青磁が認められ、近世では陶磁器片、漆器、火打石などの石製品、銭貨・煙管などの金属製品が出土しています。

また、明確な遺構は確認できませんでしたが、縄文時代晩期後半から終末期の安行 3c・3d 式土器や浮線網状文土器も出土しています。

調査区中央の窪地は時期を特定できていませんが、弥生時代には既に存在していた可能性が考えられます。この窪地からは、建築材や木製品が出土しました（写真 5）。さらに、小銅鐸と呼ばれる、銅鐸のミニチュアも 1 点見つかりました（写真 6）。小銅鐸は全国でも 60 点ほどしか報告されていない貴重な出土品で、都内での発見は本資料で 3 例目となります。しかも今回は、赤銅色を保った状態で出土しました。通常こういった銅製品は緑青色のさびに覆われてしまうことが多いのですが、染地遺跡の場合は低湿地に位置していることが幸いしたようです。

このように、幅広い時代にわたり遺構・遺物が見つかることから、この地は長く人々の暮らしに利用されてきたと言えるでしょう。

現在は整理作業を進めていますので、また新たな発見があり次第、当センターのホームページ等でお知らせします。（間 直一郎）



写真 2 下から上へ伸びる噴砂の痕

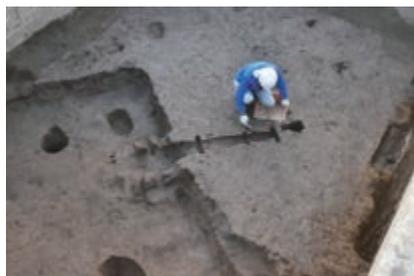


写真 3 長煙道型のカマド調査風景



写真 4 板や杭の痕跡が残る貯蔵穴



写真 5 窪地から出土した建築材や木製品



写真 6 窪地から出土した小銅鐸

所在地 : 中央区築地五丁目
調査期間: 2020年2月~7月(発掘)
調査面積: 約2,865㎡

築地市場跡遺跡は、2018年に豊洲に移転した中央卸売市場（築地市場）の跡地の一角に所在する遺跡です。地理的には東京湾の奥に位置し、隅田川の河口にあたります。今回の発掘調査では、開発の進んだ現在の築地とは異なる江戸時代の東京湾沿岸の風景と、当時の大名屋敷内の生活の一端をうかがい知ることができました。

史料によると、この場所はもともと浅い海であったところを、江戸時代初期に埋め立てて陸地化し、尾張藩の蔵屋敷として利用していました。蔵屋敷とは倉庫などの役割をもつ屋敷で、舟運の便を考えて、ほとんどの場合は本遺跡のように水辺に接して設けられています。調査では、この蔵屋敷にあった舟入の南東端が、当時の絵図と符合する位置で見つかりました（第1図）。

当初、舟入の縁辺には石垣による護岸施設があることを想定していましたが、予想に反して江戸時代の護岸施設はまったく検出されませんでした。むしろ土層の観察では、舟入から陸地までなだらかに地形が続いていることが読み取れました。現代の感覚からするとおよそ舟入らしくありませんが、満潮時には海水に浸かり、干潮時には干出する斜面が舟入の一部に存在していたのです。（※舟が着く北西端には石垣の護岸があったと思われます。）

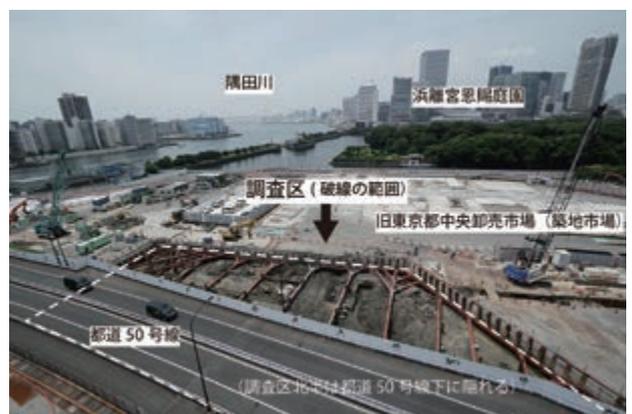
また、そこには葦あしの可能性のある植物遺体を大量に含む層が広がっており、その土壌を詳しく調べてみると、現在の東京湾では見られなくなってしまった体長2~5mmほどのカワザンショウガイ、ヨシダカワザンショウ、オカミミガイなどの微小巻貝が見つかりました。これらの貝は葦原せいそくに棲息することで知られているものです。葦原は先に述べたような干出・冠水のある地形に発達することからも、舟入の南東端には、生物相豊かな葦原が広がっていたことが分かったのです。こうした様相が景観づくりの一環だったのか、単なる自然の営為なのかは今後の検討課題です。

さらに、葦原からは本遺跡の遺物の9割が出土していることも特筆されます。その内容は18世紀第2四半期から第3四半期にわたる陶磁器類、土製品、

瓦・瓦加工品、石製品、銭貨・金属製品、木製品・漆器・繊維製品・炭、骨・貝製品、自然遺物（獣骨・貝・種子）などの生活道具や生活ごみです。これらは時期が限られることから、一時に投棄されたものであると考えられますが、陶磁器にはほとんど割れていないものも散見され、まだ使えるものが捨てられている様子も見受けられました。この時期は史料では蔵屋敷の再開発の時期とされていますが、大量の投棄がこれに伴うものなのかどうかを含めて、今後さらに検討していきます。（宮本 由子）



第1図 調査範囲の位置（延享(1744~1748)年中の絵図によるモデル図）



第2図 調査範囲を北から写した写真

近頃、地球温暖化や異常気象、カーボンニュートラルなどという言葉があちらこちらでよく聞かれるようになりましたが、身近に感じられない、実感が伴わないという方もおられるかもしれません。ただ、自然は正直です。近年は以前より早めに季節が進んでいると感じることが多くなってきました。今年は特にそう感じます。



カタクリ

このような現象は、遺跡庭園でも見受けられています。カタクリは、いつものように3月中に咲きましたが、ニリンソウの後に咲くはずの

イチリンソウが、ニリンソウとほぼ同時期に咲いてしまい、4月中には花の季節を終えてしまいました。



(上)
ニリンソウ



(下)
イチリンソウ

また、火おこし体験の着火剤に用いているコナラの花や、庭園入口にある大きなツツジも、5月の連休頃に盛りになるところが、今年は4月半ばで花期を終えてしまいました。花芯を伸ばしたトチノキはもう開花しています。例年だと4月に入って芽を出すカラムシも3月下旬には一斉に芽吹き、早いものは4月の下旬に繊維が採れるほどに成長しています。



タラノメ

春に食べておいしい山菜類もあっという間に旬を過ぎてしまいました。「King of 山菜」とされるタラの芽は3月の初めごろから膨らみ始め、下旬

には食べ頃になっていました。ワラビやゼンマイも同じように芽を伸ばしはじめ、コゴミは少し遅れて顔を出しましたが、それでも昨年よりかなり早く旬が終わり、まるでジュラ紀のシダ類よろしく葉を広げた状態です。庭園の木々全体も同様で、今年はずでに初夏の季語に相応しい「新緑の季節」に突入しており、これから増々その色を濃くしていくことでしょう。



ベニシジミ



カラスノエンドウで吸蜜するキタキチョウ



そうした植物に合わせ昆虫や小動物たちも早めに活動を開始しています。ベニシジミやキタキチョウなど早春から見られる馴染みのチョウに加え、各種のアゲハ達なども4月の初めには飛び始めました。

庭園の各所に繁茂したカラスノエンドウ（ヤハズエンドウ）には多くのアブラムシ、その天敵のテントウムシ、さらには昆虫類を捕食するニホントカゲ、そのまた天敵となる各種の小鳥たち。彼らの活動もあちらこちらで盛んです。



ナナホシテントウ



ニホントカゲ

日本は「四季の国」と呼ばれます。巡る四季のなかで豊かな自然環境が育まれています。そのサイクルが崩れてしまったらいったいどうなるのでしょうか。

遺跡庭園の動植物たちの未来が、どうか明るいものであってほしいと願うばかりです。（並木 仁）

かゆい所に手が届く

遺物の基本的な見方 動物遺存体(貝類)編

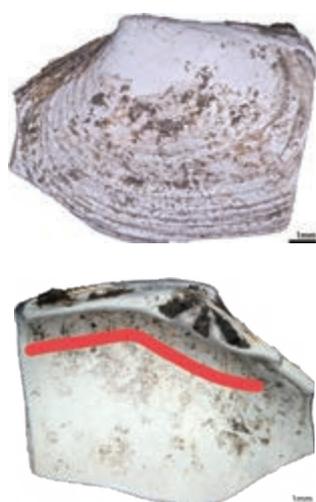
遺跡から出土するのは土器や石器だけではありません。時には「動物遺存体」と呼ばれる生物のからだの一部が見つかることがあります。今回取り上げる貝殻もそうした遺物のひとつです。どの貝類がどのくらい出土したかという情報は、過去の自然環境やそれに基づく当時の人びとの食事の内容、地域ごとの文化のちがひ、流通のありかたやその時期的変化などを検討する材料になります。今回はそうした、遺跡から出土する貝殻を理解する上で最も重要な、「種(species)の見分け方」についてお話します。

みなさんは、浜辺で貝殻を拾ったことはありますか？その貝類の名前が知りたいときに、まず利用するのは図鑑でしょう。しかし、波で洗われた貝殻はときに表面が風化して色を失っていたり、割れていたりして、図鑑に載っているきれいな写真と比べると難しいことがあります。

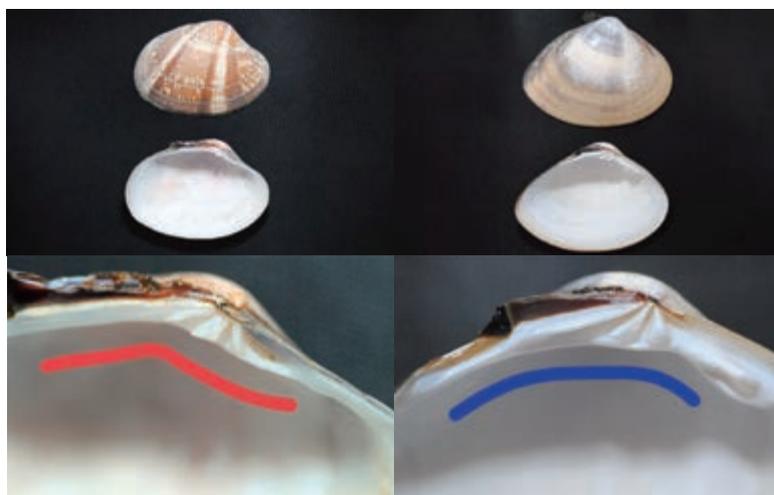
いわんや、数百年前、数千年前の遺跡から出土する貝殻をや。保存環境に恵まれて、色も形もあまり損なわれることなく出土した場合はその限りではありませんが、第1図に示したように色が落ち真っ白で、割れている状態のものもよく見られます。

ここで種を見分ける手がかりとなるのは、壊れずに残っている形の特徴です。そしてその形から種を検索する方法はとても単純。ズバリ、標本との比較です。

貝殻の形や、関連する他の遺跡で出ている貝種、



第1図
築地市場跡遺跡出土貝



第2図 現生標本 左: 木更津産アサリ、右: 千葉県産チョウセンハマグリ
(例えば、アサリは「蝶つがい」の下の縁の形が特徴的。)

貝類の生息環境などを考慮してある程度のターゲットを絞ったら、博物館や研究者、時にはスーパーの生鮮品コーナーなどを頼って標本を用意し、遺跡から出土した貝殻と比較します。(お店での売り名は生物学的な名称と異なることもあるので注意！)

第2図に示したのは、私が味噌汁をいただいた後の生ごみ…もとい標本です。第1図に示した遺跡産の貝殻と比べると、どうでしょう。二枚貝の「蝶つがい」の部分の形から、これはアサリの貝殻であることが分かります。

以上は簡単な例でしたが、ものによっては生物学の観点で貝類を研究している方から「こんな破片で分かるのですか？」と驚かれることもあります。生体を相手にする学問でも貝殻の形は重要な観察点ですが、多くの場合は貝殻の模様や、全体の形、軟体部(私たちがおいしく食べている身の部分)のようなもっと分かりやすい形質を利用できるので、細かい形に注目せざるを得ない現状に驚かれるのです。(※化石の研究者はこの限りではありません。)生物学や美的鑑賞の目的から作られた図鑑で、遺跡から出土した貝類の種を見分けるのが難しい理由のひとつがここにあります。

種を見分けるために細かい形に注目することは、風化と破損が当たり前の考古学ならではのといえるかもしれません。

(宮本 由子)

京王相模原線多摩境駅（町田市小山ヶ丘）の東側は、現在は平坦に造成されて街並みが広がっていますが、開発前は小さな谷が入っていました。ここにあったのが、今回取り上げる No.938 遺跡です。その調査における集落確認の“顛末”についてご紹介しましょう。



No.938 遺跡近景

調査は、今からちょうど30年前の1991年秋から翌春に行われました。当初の調査対象は、谷底の緩やかな斜面を中心とした7,000㎡余でした。遺跡の分布調査において採集された土器片によって、調査前から古代の集落の存在が予想されていました。ところが、実際に調査に臨んでみると、見つかったのは近世の炭焼窯5群21基が中心で、立地の良さそうな緩斜面で確認された平安時代の住居跡はたった2軒しか見つからなかったのです。

この時期の住居跡は、単独で検出されることがしばしばあったことから、今回もこれに類似した事例かと考えながら調査を進めると、急斜面の裾部分にあたる南側の調査区境界で、あらたに2軒の住居跡が確認されたのです。この2軒がいずれも調査範囲外に広がっていたことから対応を協議した結果、調査範囲を急斜面～尾根上に広げ、12,000㎡を対象とすることとなりました。するとどうでしょう。当初の範囲外から5軒の住居跡が次々と姿を現し、計9軒を数えるに至ったのです。この中には、今年度の企画展示でも紹介されている土師器甕を用いて煙道を構築した竈の例なども含まれており、調査区の拡張によって、多くの貴重なデータを得る



(左) No.938 遺跡 4号住居跡（平安時代）



(右) 4号住居跡 土師器甕を用いて作られたカマド

ことができました。何より、急斜面での確認によって、集落立地に関する従来のイメージにも一石を投じるようになったのが最も大きな収穫だったと言えるでしょう。

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

#48 多摩ニュータウン No.938 遺跡



No.938 遺跡 5号住居跡（平安時代）出土 緑釉陶器碗

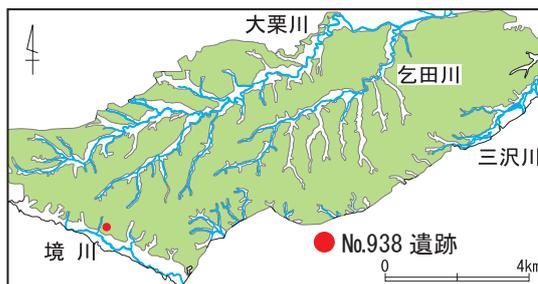
実は、話はこれだけで終わりません。拡張した南側および東側の尾根上で、今度は弥生時代中期

の土器片が1片ずつ見つかったのです。「何故、こんなものが？」と周囲を慎重に確認したところ、各々の拡張区で住居跡が2軒ずつ検出され、にわかに多摩ニュータウン遺跡では初となる“弥生時代中期集落”の様相も呈してきました。そして翌年、南側に隣接する No.939 遺跡の調査において同時期の住居跡4軒、方形周溝墓1基、土坑8基が確認され、集落の全容はいよいよ明らかとなっていきます。



No.938 遺跡 13号住居跡（弥生時代）

「遺跡は、掘ってみないと判らない」毎度思うことではありますが、この時も、広い視野と柔軟な姿勢で臨むことの必要性を思い知らされた調査として、深く記憶に残っています。（長佐古 真也）



転用品を埋める

遺跡発掘調査の「現場」では、「埋められた」モノが多く見つかります。人はなぜモノを「埋める」のでしょうか？今回の企画展示では、

- 1) 建物や施設の部材として「埋める」
- 2) 儀礼や葬儀などに関連して「埋める」

という二つの視点から、「現場」に残された「埋められた」モノをご紹介します。展示の中身を少しのぞいてみましょう。

多摩ニュータウン（以下「TN」と略）No.67 遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡の中央に大きな土器が埋められていました。この土器は、胴の中央以下が打ち欠かれ、炉（いろり）の囲いに用いられていました。土器の中には炭や焼けた土が詰まっています。この場所で実際に火が焚かれていたことがわかります。このように土器を埋めて作られた炉を、「埋甕炉」と呼びます。現代においてもコンクリートなどを建物の基礎として埋めるように、昔の人びとも生活のためにいろいろなモノを部材として地面に埋めていたのです。

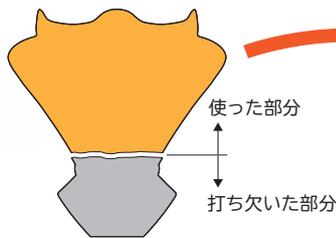
他方、同じ縄文土器でも、日々の暮らしとは少し

違った目的で埋められた事例もあります。それがTN No.72 遺跡で発見された、土坑の中の縄文土器です。この土器は掘った穴に逆さまに埋め置かれており、また口縁は打ち欠かれ、底には穴が開けられていました。土器の中には骨粉が残っていたことから、棺として使われたようです。このように人の誕生や死、あるいは様々な信仰の機会にも、祈りを込めてモノが埋められていました。

さて、ここでご紹介した二つの事例、「埋められた」ということ以外にもう一つ共通点があります。それは、本来はほかの目的で作られたものを、別の用途に「転用」しているということです。埋められた縄文土器は、どちらも深鉢という煮沸用の器で、それをあえて打ち欠いて使っています。この転用という行為、まだ使える手近な材料を使う、いわゆる「もったいない」精神の表れとも考えられますが、モノ自体への何らかの思いから転用された可能性もあるでしょう。数多ある生活道具の中で、なぜこれらが転用品に選ばれたのか、という視点も「現場のミカタ」のツウな見方と言えるでしょう。（大網 信良）



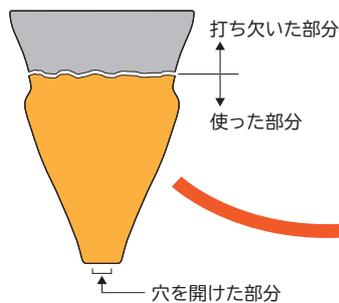
TN No.67 遺跡 埋甕炉に使われた縄文土器



埋甕炉が見つかった様子



TN No.72 遺跡 甕棺に使われた縄文土器



甕棺が見つかった様子

※今号の表紙：特集にちなんで表紙も染地遺跡から。上段：出土遺物 中段：小銅鐸出土状況 下段：遺跡遠景

